

氏 名	まる やま じゅん こ 丸 山 淳 子
学位(専攻分野)	博 士 (地域研究)
学 位 記 番 号	地 博 第 59 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	ア ジ ア ・ ア フ リ カ 地 域 研 究 研 究 科 ア フ リ カ 地 域 研 究 専 攻
学位論文題目	ポスト狩猟採集社会への移行に関する研究 ——ボツワナにおけるサンの再定住と社会関係の再編——

論文調査委員 (主 査) 教 授 市 川 光 雄 教 授 太 田 至 准教授 木 村 大 治
名誉教授 田 中 二 郎

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、南部アフリカのカラハリ砂漠で狩猟採集生活をつづけてきたサンが、開発計画にともなう再定住政策のもとで、自分たちの文化や社会を再編し、ポスト狩猟採集社会に移行する過程を明らかにしたものである。研究のもとになった資料は、ボツワナ政府が設けたサンの再定住地において2000年から2006年までのあいだに実施した合計23ヵ月のフィールドワーク、及び関連する報告や行政文書等の文献から得ている。

第1章では調査地域の歴史に注目し、初期の出版物や行政文書等の資料をもとに、サンが再定住政策以前から他民族と接触しており、そのなかで多様な生活様式を共存させてきたことを明らかにした。とくに、ツワナ王国における貢納制度の仲介者であったバントゥ系のバカラハリとサンの間には以前から混血が進んでおり、これらの子孫の一部がその後、狩猟採集を行うなど「サン化」していったこと、及び、サン自身のなかにも狩猟採集をつづける者のほかに、農牧民の村や鉱山、大農場などに移り、多様な経済活動に従事する者が現れていたことを示し、この地域のサンが複雑な歴史的、民族的背景をもつことを指摘した。

第2章では、ボツワナ政府による、サンを対象とした「遠隔地開発計画 (RADP)」の歴史と現状を論じている。RADPは、「ボツワナ国家への統合」と「脱狩猟採集民化」を目的に、サンの再定住地への移住を促がすものであったが、その結果、再定住地では過度の集住状態が生じ、サンの大規模なコミュニティが誕生したこと、また再定住地が、サンを開発計画の恩恵を受けた「国民」にしようとするボツワナ国家の政策と、伝統的な文化を守る権利をもつ「先住民」としてサンを支援する国際的な先住民運動が激しく対立する場所となっていることを指摘した。

第3章では、再定住後の生業活動の再編過程を論じている。再定住地では政府が提供する賃労働が主要な経済活動となったが、その周囲の原野に住民が自発的に拓いた居住地「マイパー」では、農業、牧畜に加えて、狩猟採集活動の継続が試みられた。さらに再定住地とマイパーのあいだでは、物資やサービスの相互提供、住人の転居が頻繁に観察され、新旧の生活様式が相補的なものとなっていることなどが明らかにされている。

第4章では、再定住地における居住様式と土地利用、社会関係が分析されている。再定住地では、それまでの共住関係を無視して機械的に居住用プロットが配分されたが、それに対してマイパーでは既存の社会関係を反映した家屋配置や、かつての生活域の位置関係を反映した土地利用が見られることを示した。また、再定住地とマイパーにおける多彩な生業活動の併用によって、異なる生業に従事する家族間の分配や相互扶助等の社会関係が以前よりも強化されて現われていることを指摘した。

第5章では、再定住地で実施されている援助政策計画が住民間に格差をもたらしていることを示すとともに、そうした格差を是正する食物分配や相互扶助が、再定住以前から共住関係をもっていた者のあいだでのみ行われており、それ以外の者とは雇用関係や売買関係が結ばれていることを明らかにした。これらは、平等的で相互扶助の単位であったかつての共住集

団が、他集団との差異を強調するものとして機能していることを示すものであるが、一方ではサン自身が、こうした雇用関係や売買関係を旧来から行われていた相互扶助の延長線上に定位したり、サンの富裕層をバカラハリとみなしてサン社会の外部に位置づけるなど、従来の平等的な規範との折り合いをつけようとしていることも明らかになった。

第6章では、再定住地におけるヘッドマンの選出過程を分析した。とくにこの過程で、従来のサン社会では話題にのぼらなかった、バカラハリとの系譜関係がヘッドマンの要件として議論されたことに注意を促し、これが、ヘッドマンをバカラハリとして見なしして外部化するとともに、国家や国際社会に対しては彼らをサンの代表者とするといった、サンの工夫の産物であると指摘している。

以上のように本研究では、再定住の過程において、狩猟採集社会としてのサンの特徴として議論されてきた生業活動や土地利用、分配や共同の慣行、政治的リーダーの不在などが大きく変化していることが明らかにされた。その一方でサン自身が、開発計画を利用しつつ、狩猟採集を含む複数の生業を組み合わせたり、外部社会と積極的に関わる政治的代表者を生み出すなど、これまでに築いてきた文化や社会を新たに展開させていることが示されている。そして、これらは、サンが「ポスト狩猟採集社会」へと移行する過程で独自に再編したものであり、「開発」か「伝統」か、あるいは「国民」か「先住民」といった対立言説では説明され得ないものであるとしている。

論文審査の結果の要旨

世界の隅々までグローバル化が進行する現在、長年にわたって狩猟採集生活を営んできた社会も大きな変化を余儀なくされている。そのなかで彼らがどのように、新しい状況に既存の文化や生活を適応させつつ独自性と自立性を保ってゆくのかという問題は、人類文化の多様性を維持し、少数民族の将来像を描く上でも重要な課題である。本論文は、南部アフリカのボツワナ政府によって再定住化させられた狩猟採集民サンを対象として、この課題に取り組んだ意欲的な研究である。狩猟採集民としてのサンを対象としてきた従来の研究では触れられなかった再定住地における生活の実態が、合計23ヵ月間にわたる綿密な調査にもとづいて、厚みのあるモノグラフとしてまとめられている。

近年、アフリカの狩猟採集民が国家体制に取り込まれる際にさまざまな問題が生じていることが報告されているが、それらに関しては、彼らの日常的な実践に対する理解を欠いたまま政策の是非を論じたり、権力関係を暴露するといった政治的な側面に議論が集中する傾向があった。また彼らが直面している問題を、歴史的な経緯を踏まえたうえで、文化や社会の持続性と変化という観点から具体的に検証する試みも多くはない。このような状況において、本研究は、再定住地における生計活動の実態や社会生活の仕組みを丁寧に分析するとともに、同一社会に対する過去30年に及ぶ研究成果と比較検討することを通して、狩猟採集社会が再定住にともなってどのように再編されるのかを鮮明に描き出したものとして高く評価できる。

サンに関する人類学的研究は1950年代に始まり、自然に強く依存した狩猟採集生活や平等的な社会生活の特徴などが明らかにされてきた。本研究は、それらの特徴が再定住地において大きく変容していることを明らかにしたうえで、そうした変化が、狩猟採集民の「国民」への同化というよりも、むしろ「ポスト狩猟採集社会」への移行過程として位置づけられると指摘している。「ポスト狩猟採集社会」論は、狩猟採集が主生業としての位置づけを失った後も、狩猟採集社会の諸特徴が引き継がれ、再編されていることを積極的にとらえようとするものであるが、具体的な事例にもとづいてその過程を論じた研究はこれまでにほとんどなかった。

本研究では、「ポスト狩猟採集社会」への移行を如実に示す例として、再定住地周辺の原野に「マイパー」と称する、かつてのキャンプを彷彿とさせる空間が生み出され、マイパーと再定住地の双方を含んだ生計維持や土地利用のシステムが形成されたことに注目している。それは、多様な生業活動の併存やそれを支える相互扶助的な社会関係など、サンが従来から備えていた生活と社会の特徴を維持・強化するものであり、彼らが再定住地に、「自身の文化を再生産する場」としての意味を見いだしたことを示すものである。「脱狩猟採集民化」をめざした政府の政策が、その目的とは裏腹に、マイパーすなわち狩猟採集が継続される場の形成を促したとする点は、「同化主義的で強圧的な国家政策」と「抑圧される先住民」という単純な対置を越え、サンと国家の複雑な関係を示唆する重要な指摘である。

本研究ではさらに、この地域の歴史資料からサンと近隣農牧民バカラハリとの民族的境界が流動的で曖昧なものであることが示され、現在のサンが、このような流動性を生かして、新しく生まれた富裕者や政治的リーダーなどを「バカラハリ」

とみなすことによって、内部的には従来の平等的な生活規範と折り合いをつけ、同時に外部社会に対しては、彼らがサンの代表者として政治的、経済的に振る舞うことを可能にしていると指摘している。狩猟採集社会研究における修正主義（リビジョニズム）の主張、すなわち狩猟採集社会のあり方を外部社会との歴史的な関係において見直す必要性が叫ばれてから久しいが、具体例にもとづいてそれを実践した研究はごく少ない。本研究は、現在のサンの状況を、彼らを含む地域の歴史との連続性において解明したものであり、狩猟採集社会の歴史的な理解に対して重要な貢献を果たした。

以上のように本研究は、外部社会と接触することによって消滅の危機にさらされるといわれてきた狩猟採集社会が、実際には国家や国際社会との密接な関係をもちながら、その特徴を維持しつつポスト狩猟採集社会に移行しうることを示し、少数民族の新しいあり方を描き出した研究として高く評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成20年1月21日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。